

非核への想いを声に

東京反核医師の会ニュース vol.110



非核への想いを声に



東京反核医師の会ニュース Vol.110 目次

- 原水爆禁止2019年世界大会 in 長崎 2
- 第30回反核医師のつどい 京都で開催 5
- 第15回奥多摩町平和のための戦争展を開催 7
- 声明 「東電裁判」無罪判決に抗議する 9
- 事務局だより かわら版 10
 - ▶新ホームページがオープンしました！
 - ▶東京反核医師の会 総会・記念講演会のご案内

<表紙写真について>

「浦上天主堂遺構」(2019年8月4日、浦上天主堂にて撮影)。

1945年8月9日、長崎市への原爆投下により、爆心地の至近距離にあった浦上天主堂は全壊した。原爆投下の時刻には告解が行われており、多数の信徒が堂の中に集っていたが、全員死亡した。戦後、再建された後も、遺構の一部が残されており、原爆の傷跡を今に伝えている。

写真の三体の聖像もそうした遺構の一部で、右は聖セシリア像(音楽の聖人)、中央がイエスの聖心(みこころ)像であるが、左の一体が誰の像なのかは、爆風で頭部が失われたため不明である。

原水爆禁止2019年世界大会 in 長崎



8月7日から9日にかけて、長崎市内で2019年原水爆禁止世界大会・長崎が開催され、東京反核医師の会からは矢野正明代表世話人(東京歯科協会理事)が参加した。8日の分科会では映画監督の有原誠治監督が主催する「映像のひろば」で企画・運営に参加した。

◆最大の力は市民社会の中にある

7日の開会総会では、約4,000人が参加した。初めに、開会にあたって、前日に南米のボリビアが核兵器禁止条約を批准し、これにより条約発効に必要な50カ国のうち半数に達したことが報告され、会場は大きな拍手に包まれた。



8月7日、開会総会で挨拶する田上長崎市長

安齋育郎氏は、「2020年を核のない世界への転換点にすべき。そのために核兵器使用の破滅的結果を周知していかなければならない」と述べた。また、会場に駆け付けた長崎の田上富久市長は「米口の動きなど、



「映像のひろば」では映画を観るだけでなく、参加者の活発な意見交流が行われた

厳しい情勢もある中で、市民社会の重要性を見つめなおすことが大切。核をなくすための最大の力は市民社会の中にある。その一つがヒバクシャ国際署名。皆さんと取り組んでいきたい」と話し、市民と協同していく姿勢を改めて打ち出した。

また、各国の政府代表としてオーストリア、メキシコ、ベネズエラの公使や駐日大使らが発言した。

◆経験を次世代に共有するために

8日は分科会「映像のひろば」に参加し、企画・運営に参加した。「映像の広場」はアニメーター／映画監督の有原誠治氏を中心にした企画で、原爆に関する映像を通じて学習を深めていくもの。今回は、自身も被爆しながらも被爆者達の治療に尽力した秋月辰一郎医師の著書をもとに作られた長編アニメ作品「アンゼラスの鐘」や、武蔵大学の学生たちが取材・作成を行い、被団協の歴史を中心に反核運動の展開を追ったドキュメンタリー「声が世界を動かした～」などの映像作品が上映された。また、平和行進のドキュメンタリー「山口逸郎さ

んの平和行進2019」上映の際には、山口さん本人から直接話を聞く場面もあった。意見交流では、「アニメ作品はマイルドな表現になっていても原爆の悲惨さを的確に表現していると思った。白血病で徐々に人が亡くなるのがとても恐ろしかった」といった、原爆の表現についての感想や、「こうした大会に出ても"その時だけ"の経験になりがち。映像なら体験を共有しやすい。地域に帰って上映会をやりたい」など、経験を身近な人や次世代に共有していくことについての感想が多く聞かれた。

◆核なき世界に向けて行動を

9日の閉会式（ナガサキデー集会）では、開会式を超える5,000人（主催者発表）の参加者が来場した。会場では、日本と韓国の被爆者が自分や家族の被爆体験を語り、「核兵器のない世界へ行動を」として海外代表がスピーチを行った。

「核兵器のない世界をめざす被爆国の決意」を語る場面では、署名に取り組んでいる北海道の伊達高校の生徒らが登壇し、「核兵器を廃絶させることは固く閉ざされた扉の前にいるようだ。それでも、私とみなさんには声という武器がある」と会場の参加者たちにエールを送った。また、純心女子高校の高校生たちも「高校生1万人署名」で集めた署名20万筆を高校生国際平和大使が国連へ届けることを報告し、会場は大きな拍手に包まれた。

最後に、署名アクションとして署名の目標値を書き込める「核兵器をなくそう」と書かれたブルーのカードを掲げて一斉にアピールを行い、閉会宣言があり、閉会した。

原水禁世界大会に参加して

東京反核医師の会代表世話人 矢野 正明

8月7～9日にかけて、原水爆禁止2019年世界大会長崎大会が開催されました。

東京反核医師の会からは代表世話人の私と事務局2人が参加しました。

1日目開会総会には4,000人が集まりました。田上富久長崎市長があいさつ。「私たちが被爆者のいる時代の終わりにいることを、みなさんと考えたい」と訴え、市民社会の力を集めることの重要性をよびかけました。



「映像の広場」意見交流の様子。右は矢野代表世話人

2日目は第10分科会「映像のひろば」の運営に当たりました。映画監督の有原誠治さんの解説で「NAGASAKI 1945アンジェラスの鐘」など映画5本を上映。参加者同士小グループで交流しました。昼食もはさみ全体での討論も活発に行われました。若い参加者が目立った分科会となりました。

3日目は長崎市主催の平和祈念式典に参加。田上長崎市長は「小さな声の集まりである市民社会の力は、これまでも、世界

を動かしてきました。私たち一人ひとりの力は、微力ではあっても、決して無力ではないのです。」「日本政府に訴えます。日本は今、核兵器禁止条約に背を向けています。唯一の戦争被爆国の責任として、一刻も早く核兵器禁止条約に署名、批准してください」と訴えました。

被爆者の平均年齢は82歳を超えています。「平和への誓い」を行った山脇佳朗さんは爆死した父親を兄弟3人で茶毘に付した被爆体験を語り「被爆者が生きているうちに核兵器廃絶を」と訴えました。しかし安倍首相は核兵器禁止条約に全く触れず「核保有国と非保有国との橋渡し」といった空虚な言葉をならべるだけでした。

閉会総会には21カ国85人の海外代表と全国から6,000人をこえる代表が参加しました。来年のニューヨークでの原水爆禁止世界大会をはじめ、2020年NPT再検討会議に向け、草の根からの運動と諸国政府の力を大きく結集して、核固執勢力の孤立をいっそう深めていまいと訴えました。



「平和への誓い」で、核廃絶を訴える山脇佳朗氏

第30回反核医師のつどい 京都で開催

第30回「反核医師のつどい in 京都」が9月14、15日（土、日）の2日間にかけて、メルパルク京都で開催された。

東京反核医の会からは、向山新、矢野正明各代表世話人、田崎ゆき、渡辺吉明各世話人が参加した。

◆ Don't Bank on the Bomb（核兵器にお金を貸すな）

東京反核医師の会世話人 渡辺 吉明

1日目の基調講演では大阪女学院大学の黒澤教授が、「米国の核軍縮は50年で最悪の状況だ」と指摘。そのほか、「京都『被爆2世・3世の会』」の世話人の守田さんからの「2世、3世の健康問題の実態を明らかにし、私たちの子どもの健康を守ることにつなげる」との活動報告等があった。

今回、メインとなった特別シンポジウム「金融機関の核兵器製造企業への融資を止めさせよう」では、PAX 核軍縮プログラムマネージャーでICAN（核兵器廃絶国際キャンペーン）の中心メンバーであるスージー・スナイダーさんをお招きし、「核兵器にお金を貸すな」プロジェクトについて、また、目加田説子・中央大学教授にクラスター爆弾と金融機関の責任について、それぞれ講演をいただき、原和人 PANW 代表世話人・医師から「日本の主要銀行に対する核兵器製造企業への投融資に関するアンケート」の結果が公表され、多くのものを学習・討議した。

核兵器禁止条約早期発効のための行動の



スージー・スナイダー氏（PAX 核軍縮プログラムマネージャー）

1つとしてICANは、「核兵器にお金を貸すな」運動を呼び掛けている。この運動は、市民社会が「金融機関が核製造企業へ投融資していないかを注視し、評価している」ことを金融機関などに伝え、投資を止めさせることを目標としている。さらに私たち個人も金融機関に託した「自分のお金」に対して、収益性のみに意識を奪われず、その後どのように使われているのかも注視して行動する必要があると賛同し、取り組む決意をした。

◆原発差し止め・核兵器廃絶 実相に基づいた闘いを

東京反核医師の会代表世話人 向山 新

2日目は、元福井地裁裁判長の樋口英明氏の講演から始まった。

演題にもなっている「私が大飯原発を止めた理由」について、それは危ないからで、とひとついう。

危険性には、発生頻度と被害の大きさという2つの観点がある。

原発は、一度事故を起こしたらその被害は甚大で、核兵器にも匹敵する。福島第一原発も2つの奇跡がなければ東日本壊滅だったという。そして地震大国日本では、たかだか700ガルの原発の耐震強度を越える地震は頻発している。つまり、どちらの観点から見ても、原発は危険極まりないのである。



原子力発電の危険性を解説する樋口英明氏（元福井地裁裁判長）

にもかかわらず、多くの裁判官は「原発裁判は、高度の専門技術訴訟であり、原発が安全かどうかを裁判所が直接判断するのではなく、規制基準が合理的か否かを最新の科学的知見に照らし判断するのが妥当である」といって、原発周囲には、震度6, 7の地震は来ないという非科学的な予測に基づいた規制基準が合理的だと言って、原発を止めないのだ。裁判の闘い方を考えなければいけない、と樋口氏は言う。

原爆症認定集団訴訟でも、高度な科学論争だけに巻き込まれず、被爆の実相を訴えることによって勝訴を重ねてきた。そういう闘い方が必要なのかもしれないと思った。

長崎大学核兵器廃絶研究センター 中村桂子准教授は、日本は、被爆国という体面と、各同盟国という本音の間で、最近は核同盟国に舵を取りつつあるのではないかと指摘した。これには、国民の意識が反映されている。核兵器禁止条約も批准国が32カ国となり、発効に向けて着実に進んでいる。核兵器禁止条約をもっと国内で広めて行かなければいけないと感じた。

◆2019年会費納入・寄付金のお願い◆

恐れ入りますが 11月30日まで に今年2019年分の年会費5,000円をご納入ください。

また、2018年以前の会費が未入の方は、併せてお早めにご送金ください。

カンパ・寄付金も随時募集しております。

皆様のご協力をお願いいたします。

～第15回奥多摩町平和のための戦争展を開催～

8月31日、「奥多摩町平和のための戦争展」が奥多摩文化会館で開催され、104人が集まった。

戦争体験者の話を聴く「奥多摩町平和のための戦争展」は、奥多摩町の協力のもと、今年で15回目を迎える。東京反核医師の会の片倉和彦代表世話人が実行委員会の代表委員をつとめている。

今回は山梨県丹波山村（たばやまむら）出身者を含め、4人から戦争当時の体験談を語った。その後、片倉代表委員から、父・片倉徹郎氏が晩年、戦死した伯父の足跡をたどる旅行に出たことや、自身の沖縄旅行についての発表が行われた。最後に相田恵美子氏から、自衛隊の駐屯地建設が始まった宮古島の現状の報告が行われ、閉会した。

◆大切なのは話ができる場所

それぞれ年齢も出陳地も違う4人のお話のなかで、共通して挙げられていたのが「学校」「空襲」「食糧難」だった。

戦時中の国民学校では教師からの鉄拳制裁が当然のように行われていたこと、「御真影（天皇の肖像写真）」に最敬礼をさせられたことなど。廣瀬俊之さんは、国民学校での経験から「今でも生きていないもの、血の通わないものに敬礼をする気にはなれない」という。若林みよさんの学校は、兵隊の宿舎になっていたそう。勉強どころではなく、藁草履を作ったり、草取りや薪拾いをさせられた。卒業の時に渡された通知表には、勉強の成績は何もなく「勤労：優」とだけ書かれていた。学校という、自ら学び考えるための場所を、戦争は壊し、変質させる。

吉野ミツ子さんは、終戦間際の7月30日夜の空襲で夢中になって逃げまわり、命からがら逃げ延びたが、その空襲で友人2人を亡くした。



空襲体験を語る吉野ミツ子さん（8月31日、奥多摩文化会館）

原島節子さんは、飛行機が炎上しながら富士山の方へと飛んでいくのを見たという。空襲を警戒して、夜には家の明かりに黒い布を巻いて光が漏れないようにしていたので、夜中に外に出ると真っ暗で気味が悪かったそう。

戦中、戦後の食糧難は厳しく、米のご飯が食べられずにさつま芋を蒸かしたものや大豆を炒って食べた。中には飢えに追われて「さつま床（さつま芋の苗床）」を食べようとした人もいたという。

どの方のお話も口調は穏やかで、それで

も淡々と語られていく事実を通じて、「こんな経験はもう二度としたくない」という強い気持ちが感じられた。

沖縄の青年の発言を紹介した片倉代表委員の「現代の社会は、話をしづらい雰囲気になっている。いろんな考えの人が集まって話をできる場が必要だ」という言葉が印象に残っている。

戦争体験者の話を直に聞くことができる機会は、これからますます貴重になっていく。この「平和のための戦争展」も、社会の片隅にもうけられた"場"のひとつだろう。

わたしもわたしの手の届く範囲で、気持ちや考えや、記憶を伝え合える場所をつくっていきたい、という思いを強くした。

(事務局：江島)

第15回奥多摩町平和のための戦争展を開催して

奥多摩町平和のための戦争展 実行委員長 片倉 和彦
(東京反核医師の会代表世話人)

地味な行事ですが、それでも当日110人の方が集まって、戦争の体験談などを聞いてくださいました。この行事で戦争の体験を話していただくようになって12年目、最初のころに従軍の体験談、原爆被爆の体験談、東京大空襲の体験談などを話してくださっていた方は、永眠されたり体調を崩されたりしています。

それでも今回、4人の方に戦争避難の話、戦争のころの生活のこと、戦前とはどういう世の中だったのか、などの話をお聞きすることができました。父親が中国でコレラで亡くなった方は、「もしかして父親が追いつめられて食べた作物が日本軍の所業と関係していたのかもしれない」と言及されました。92歳の女性は、戦争のころの食べ物のことや生活のことを具体的に話しました。

また、今回は、2人の50代の方が、出身地である宮古島で起きていること、



また父親が父親の兄が亡くなった海域を捜して86歳になってからそこに棚を手向けるたびに出たこと、を話しました。

特殊な体験ではない戦争のころの話、でも、近所の知っている方が話すと強い印象を持って伝わるようです。当日の会場カンパで翌年の資金を稼ぎ出すとかぼそい会ですが、何とか続けていかねばいいなと思っています。

★2019年10月25日、「東電裁判」無罪判決に抗議する声明を下記のとおり発出し、東京地裁、東京電力、内閣府宛てに送付しました。

「東電裁判」無罪判決に抗議する

2011年3月の東京電力福島第一原発事故をめぐり、業務上過失致死罪で強制起訴された東電の勝俣恒久元会長ら旧経営陣3人に対して、東京地裁は2019年9月19日、無罪判決を言い渡した。未曾有の被害をもたらした事故に対して、企業の責任を問うことを放棄した異様な判決である。

今回の裁判では、海拔10メートルの原発敷地を超える津波を予見し、事故を防げたかが争点となった。国は2002年に、福島沖でマグニチュード8.2前後の地震とそれに伴う津波が発生する可能性を予測した長期評価を発表しており、これに基づけば最大で15.7メートルの津波が原発を襲うことになるとの試算を、東電の地震・津波対策担当者は2008年の時点で得ていたという。現場社員が上層部に対策を迫ったにも関わらず、経営陣は何の安全対策も行わなかった。

東京地裁は、指摘されていた防潮堤設置などの対策をとっても間に合ったか証明されていないとして、「事故を防ぐには原発の運転を止めるしかなく、3人には運転停止義務を課すほどの予見可能性はなかった」と結論づけた。しかし、電源設備の高台移転など対策はいくらでも取れたはずだ。具体的な対策に活かす必要がないのであれば、何のための長期評価なのか。東京地裁の判断は合理的とはいえない。

さらに、判決文には「当時の社会通念の反映であるはずの法令上の規制等の在り方は、絶対的安全性の確保までを前提としてはいなかった」とあるが、他ならぬ、国や電力会社こそが、長年にわたり原子力発電の絶対的な「安全神話」を喧伝してきたのである。ひとたび原子力事故が起きれば、広範囲にわたり重大な被害をもたらされることは歴史が証明している事実であり、経営陣には最悪の事態を想定して、安全性の確保につとめる責任があったはずだ。

東京地裁の論理を認めるなら、企業や国に対して責任を求めること自体が不可能になる。事故は繰り返され、そのたびに誰も責任を取らない体制が温存されてしまう。

我々は今回の東京地裁の不当判決に抗議するとともに、国や東京電力に対して、一刻も早い原発事故の収束と、被災者、避難者への支援、そして原子力発電事業からの撤退を求める。

2019年10月25日

核兵器廃絶・核戦争阻止 東京医師・歯科医師・医学者の会

(東京反核医師の会)

代表委員 向山 新、矢野 正明、片倉 和彦

事務局だより・かわら版

◎新ホームページがオープンしました！

8月から、東京反核医師の会の新しいホームページがオープンしましたので、ご案内いたします。

東京反核医師の会の沿革や主な活動紹介の他、発出した声明や反核ニュースの内容、会からのお知らせなどを更新しております。

また、ホームページ上から入会の申込みもしていただけるようになりました。ぜひご覧ください。



東京反核医師の会 公式ホームページURL：
<http://hankaku.tokyo/>

★東京反核医師の会 総会・記念講演会のご案内★

2020年の総会・記念講演会では、元福井地裁裁判長で、2014年に大飯原発運転差し止めの判決を出された樋口英明氏を講師にお招きします。

原発差し止めの判決が出されるにいたった経緯、原子力発電の危険性、なぜ原発訴訟の多くで運転を認める判決が出されてしまうのか、司法が抱える問題について。そして今、我々にできることは何か、等についてお話しいただく予定です。

皆様のご参加をお待ちしております。



樋口 英明 氏 (9月15日、反核医師のつどい)

「原発の危険性と司法の責任」(仮)

講師：樋口 英明 氏 (元福井地裁裁判長)

2020年2月1日 (土) 16:00～18:00

※講演に先立ち15:00から、東京反核医師の会総会を開催します。ぜひご出席ください。

会場：東京保険医協会セミナールーム

申込み：東京反核医師の会 (江島、山本麻子) まで ☎03(5339)3601 FAX03(5339)3449

東京反核医師の会ニュース
第110号

発行日 2019年11月20日

発行人 東京反核医師の会

(核兵器廃絶・核戦争防止
東京医師・歯科医師・医学者の会)

連絡先

〒160-0023

新宿区西新宿3-2-7

KDX新宿ビル4F

(東京保険医協会気付)

TEL 03-5339-3601

FAX 03-5339-3449

★公式ホームページ★

<http://hankaku.tokyo/>



©Tokyo Physicians for Elimination
of Nuclear Weapons (1988-2019)

※本誌掲載記事の無断転載を禁じます。